2012 年 9 月 12 日～18 日

カンボジア夏合宿報告書

ミレニアム・プロミス・ジャパン　ユースの会

【目次】

カンボジア夏合宿概要……2

カンボジア基本情報……4

学生会議……5

プノンペン経済特区社……8

味の素株式会社……10

住友電装株式会社……13

グッデイセンター……15

フレンズ・ザ・レストラン……17

歴史的施設……18

シェムリアップ観光……23

個人感想
國谷麻衣……25
小林夏美……26
土屋潔浩……27

【カンボジア夏合宿概要】

今回 MPJ ユースでは、東南アジア夏合宿のため、9 月 12 日から 18 日までの 7 日間、MPJ ユースメンバー12 名でカンボジアを訪れた。

MPJ ユースとして東南アジアで夏合宿を行なう目的、また今回の渡航先にカンボジアを選択した理由を以下にあげ、今回の夏合宿の概要を記す。

- 東南アジア夏合宿を行なう目的

当団体はアフリカを中心テーマとし活動しているが、その諸所の場面において現在発展著しい東南アジア諸国との比較をする事がある。そこで夏休みを利用して現地に渡航する事によって、東南アジア諸国の発展状況や依然残る課題等について考える事で、アフリカについて研究する際の重要な比較対象を得ることが一つ目の目的である。そして二つ目の目的は、大学一年生を中心とする途上国渡航が初めてのメンバーが、準備期間から帰国後までを通して、フィールドワークの手法や学生会議や報告会の運営等を学ぶ事で、当団体の主要な活動であるアフリカ研修にこの経験を活かし、より大きな成果を達成することである。以上二つの理由から今年度夏合宿を企画実施する事に決定した。

- カンボジアを渡航先に選択した理由

カンボジアは、歴史的にはポル・ポト政権による大虐殺、地理的には経済成長の著しいタイやベトナムに囲まれ、最近まで東南アジア諸国の中でも比較的発展が遅れていた。しかし昨今、ビジネスフィールドとして注目され始め、インフラ整備や経済特区設置など国内においても目に見える変化が生じている。このように、著しい経済発展の現状、その中で新たに生じる課題、虐殺などの特異な歴史的出来事が国の発展に与える影響など、様々な視点から「開発」や「発展」を思考することができると考え、カンボジアを夏合宿の渡航先として選択した。

- メンバー

大小田紗和子（責任者）	中央大学総合政策学部
國谷麻衣（副責任者）	東京大学経済学部経済学科
金子明	東京大学教養学部総合社会科学科国際関係論分科
河野充志	東京大学法学部
原慎一郎	東京大学農学部応用生物学専修
小林夏美	東京大学教養学部文科三類
小林祐介	東京大学教養学部文科三類
島田将広	東京大学教養学部文科三類
土屋潔浩	東京大学教養学部理科二類
平岡竜太朗	慶応義塾大学総合政策学部
三戸紘介	東京大学教養学部理科一類
村上真里恵	東京大学教養学部文科二類

- 事前勉強会日程

8 月 7 日	カンボジアでの「性的搾取と人身売買 」	担当：平岡竜太朗
8 月 10 日	カンボジアの文化	担当：三戸紘介
8 月 17 日	ポルポト政権と地雷問題	担当：原慎一郎
8 月 24 日	カンボジアの援助政策	担当：金子明
8 月 31 日	カンボジアの経済	担当；島田
9 月 7 日	カンボジアの教育問題	担当：小林祐介
	カンボジアでの NGO の活動について	担当：小林夏美
	模擬学生会議	

- 夏合宿日程

9 月 12 日　日本出国、カンボジア（プノンペン）到着
9 月 13 日　カンボジア経済特区社　訪問
　　味の素株式会社　　工場視察
　　住友電装株式会社　工場視察
9 月 14 日　グッデイセンター　訪問・交流
9 月 15 日　学生会議
　　歴史的施設　観光（キリング・フィールド、トゥールスレン博物館）
　　フレンズ・ザ・レストラン
9 月 16 日　移動（プノンペン→シェムリアップ）
9 月 17 日　終日自由行動
9 月 18 日　アンコール遺跡観光　カンボジア（シェムリアップ）出国

【カンボジア基本情報】

・面積　18.1 万平方メートル
・人口　13.4 百万人
・首都　プノンペン
・民族　カンボジア人(クメール人)90%
・言語　カンボジア語
・宗教　仏教
・政体　立憲君主制
・元首　ノロドム・シハモニ国王(2001 年 10 月即位)
・基本外交方針　中立・非同盟、近隣国をはじめとする各国との平和共存。国際社会からの援助と投資の取り付け。
・主要産業　農業（対 GDP 比 32.8%）、縫製業（対 GDP 比 9.0%）、建設業（対 GDP 比 6.1%）、観光業（対 GDP 比 4.5%）
・一人あたりの GDP 912 米ドル
・通貨　リエル、US ドル
・貿易総額
　　輸出 43 億米ドル
　　輸入　69 億米ドル
・主要貿易相手国
　　輸出　米国（34.1%）、香港（24.8%）、シンガポール（7.7%）、カナダ（4.9%）、オランダ（4.2%）、［日本（1.6%）］
　　輸入　中国（24.2%）、タイ（14.1%）、香港（11.3%）、ベトナム（9.9%）、台湾（9.7%）、［日本（3.2%）］

【学生会議】

１、概要

【日時】2012 年 9 月 15 日

9:00～9:30　自己紹介

9:30～10:30　ＭＰＪユースの発表と相互の質疑応答

10:30～11:30　カンボジア政府、国際機関の２つの立場からの班別会議

11:30～12:00　各班長から議論内容の発表

【場所】CAFÉ LIVING ROOM（9 Street 306, Phnom Penh）

【テーマ】カンボジアの教育問題

【メンバー】MPJ ユース 12 名　カンボジア人大学生 5 名

２、目標とそれに向けた議論方法

私たちが教育を議論のテーマとしたのは、事前勉強会において、ポル・ポト政権以降続く教育水準の低さがカンボジアの経済発展に大きな影響を与えていると考えたからである。今回の学生会議では、私たちが調べたカンボジアの教育問題に関して現地の学生たちはどのように考えているのかを知り、また、それに基づいて効果的な解決策を提示することを目的として設定した。

カンボジアの場合、教育問題に関して対処する主体は２つあると考えられ、それは第一にカンボジア政府、第二に国際機関および国際ＮＧＯである。両者の立場の違いから、教育問題に関して実行され得る解決策には相違がみられる。従って、学生会議においてもこの立場の違いを鑑みて、カンボジア政府と国際機関の２つの班に分かれて議論をすることにし、最後に意見交換をするという形をとった。

３、会議の内容

「カンボジアの教育問題」という広いテーマ設定の中で、論点を絞って議論をするために、ＭＰＪユースが事前に勉強をしてきた教育の問題点のうち以下の点を取り上げた。

・特に中等教育における低就学率と高退学率

・学校不足、筆記用具の不足

・教師の質の低さ

・都市―地方の教育格差

これらの点に関してカンボジア人学生に質疑を行ったところ、いくつかの重要な示唆が得られた。

まず中等教育の低就学率について、原因は家計の貧困にあると私たちは考えていた。授業料を除いた子供が学校に行くためにかかる費用（憲法上、中等教育は義務教育とされ、無償である)、例えば交通費や筆記用具代、制服代などを支払えなくなれば、子供を学校に通わせることは難しい。また、農村においては子供の家業手伝いが重要な労働力とみなされており、機会費用を考えても貧困が就学率の低下の原因になっているであろう。しかし、これに対してカンボジア人学生のある意見では、例え貧しかったとしても子供が勉強をすることで将来より良い生活を送ることが出来ると考えるならば、親は経済的に無理をしてでも子供を学校に通わせるだろうという。実際に、彼は農村の出身で決して裕福ではなかったが大学にまで進んでいる。彼によれば、それは親が教育の重要性を理解していたからだという。この意見から、確かに貧困は教育水準を低下させる要因にはなるが、教育の重要性を訴えるような啓発活動によっても教育水準を回復させ得るという結論に達した。

またそのことに関して、教育の重要性を国民が理解しない原因の一つは、親の職業を子供が継ぐという伝統的な価値観や“コネ”による官吏登用制度が未だ根強く残っていることであるという。教育を受けて実力をつけても、それが将来のより良い職業、より良い収入、より良い生活に結びつかなければ、決して教育が普及することはない。教育がより良い将来をもたらすというモデルを示すことが出来なければ、教育の啓発活動も実を結ばないだろう。

その他に、教師の質の低さという点において、私たちが指摘したことは、教師の学歴の低さであった。カンボジアの小学校教員の約６割が中卒以下の最終学歴であるというデータを基に問題点として取り上げた。一方、あるカンボジア人学生は教師の質ということに関して教師の仕事に対する意欲の低さを問題視していた。彼女によれば、教師の給料は一般的に低く、塾の講師など副業をしていることも多くて仕事に対する意欲が高いとは言えないという。また、教師が塾講師の副業をすることに関しては、また別の問題も生じている。それは、入試問題の塾への漏洩である。高校や大学の試験担当と塾との不正な取引も多々存在しているという。お金を払って塾に通うことのできない学生は良い高校、大学に入学できないというような、経済格差がダイレクトに教育格差に結びつくような状態は避けなければならない。

以上のような議論の後、カンボジア政府と国際機関の２つに分かれて班別の会議を行った。ここでは、主に各問題点の解決策を案出することを目的に議論を行った。案出された解決策は以下の通りである。

・奨学金等の資金的援助
・教科書、制服等の物質的援助
・学校へのアクセス改善
・教師の給料底上げ
・教職専門学校の充実
・教育の重要性を訴える啓発活動

ここで留意したいのは、カンボジア政府と国際機関の立場の違いである。カンボジア政府としては、既に国家予算の十数％を教育に費やしており（割合としては日本と同程度の割合)、上記の解決策の中で大幅な支出をともなうものは実行しがたいという。従って、カンボジア政府班は国際機関班に対して政府への教育費用の援助を解決策の一つとして提案した。一方、国際機関班としては汚職の多いとされるカンボジア政府が適切に教育費を使うかどうかが疑問視され、カンボジア政府を通した間接的な援助は望ましくないと判断した。国際機関班からカンボジア政府班への要請として、上述の汚職問題を改善すること、教員資格等の資格制度を確立することを挙げ、政府の体質改善を求めた。

６まとめ

会議全体を通して印象的だったことは、カンボジア人学生たちの政府に対する不信感であった。資金面で苦難する政府の無力と、汚職等の腐敗した政治体制がその原因である。カンボジアの将来をリードする大学生からの厳しい眼差しを受けて、カンボジア政府がこれからどのように変わっていくのかということが、カンボジアのこれからの発展の鍵になってくるだろう。その一方で、国の将来に関して真剣に考え、希望をもってそれぞれの進路を考えているカンボジア人の学生たちに出会って、きっと彼らがカンボジアの未来を明るいものにしてくれるはずだと強く感じた。

会議後の食事会

会議の様子

【プノンペン経済特区社】

PPSEZ の正門

１、プノンペン経済特区社(PPSEZ)について

ポル・ポト政権の終焉から 0 ベースで再出発したカンボジア。国内産業の未発達により保護すべき産業もないため、外資の呼び込みに力を入れている。PPSEZ もそうした政府の政令を背景に、2006 年に設立された。しかし許認可以外の権限はほぼ PPSEZ が持っており、民間企業として運営されている。外国からの ODA があまり軌道に乗らない中、PPSEZ は安定したインフラと税金の優遇などを売りに次々と外資企業を誘致している。また、プノンペン国際空港やプノンペン港、シハヌークヴィル港へのアクセスもよく、輸出品を生産する企業にとってはうってつけの場所だ。入居企業は 2012 年で 40 社を上回っており、その内の約半数が日本企業だ。社員寮、商業施設が点在し、職業訓練学校までもが建設予定である PPSEZ 内は、まるで１つの町のような様相を呈している。

２、マネージング・ディレクター上松さんのお話

PPSEZ のマネージング・ディレクターである上松裕士氏よりお話をいただいた。まず PPSEZ 設立の背景とその仕組みについて一通り説明をしていただき、その後立地条件や入居企業の内訳について教えていただいた。近年、労働賃金の上昇、日中関係悪化に伴う影響など中国一極集中型の生産体制によるリスクが高まったことで、増産するための工場を新たに中国国内に建設するのではなく、安価で若い労働力が存在するカンボジアを選ぶといったようなリスク分散を図る企業の入居希望が増えているそうだ。毎日企業が見学に来るので、多忙だとおっしゃっていた。外国企業の川上産業が多く入居する中、最近ではカンボジア資本の地場産業も増えてきているようで、ポル・ポト時代に難民として国外に逃れていた人々がこうした産業の発展を牽引しているらしい。中央機関である政府が十分な機能を果たしていない一方、カンボジアの経済人はなんともアグレッシブな精神に満ちあふれているようだ。上松さん自身も、単身赴任でカンボジアに滞在しつつ、PPSEZ のディレクターとしてカンボジアの成長を肌で感じ、楽しんでおられるように見えた。

３、プノンペン経済特区社を訪問して

カンボジアを代表する経済特区の１つである PPSEZ を訪問するということで、一体どんな場所なのだろうと心待ちにしての訪問だった。とは言うものの、正直カンボジアは紛争のイメージが強く、経済発展といってもそれほどでもないだろうというのが当初の予測だった。しかし、訪れてみると予想以上の設備が備わっており、いくつかの工場を見学させていただいてもきちんと管理・経営されているように見えた。現在、GDP 成長率 7%を誇るカンボジア。その勢いがそのまま経済特区内に満ちているように思える。確かに労働集約型の工場が多く、日本人からしてみれば単調で割に合わない仕事かもしれない。けれど、彼らは（そこで働いている日本人も含めて）留まるところを知らないカンボジアの成長を感じ取り、充実しているようだった。成長に陰りが見え始めた東アジア諸国とは反対に、成長を謳歌するカンボジアの姿はどこか羨ましいような後ろめたいような、複雑な気持ちになった。ただ１つだけ言えるのは、世界経済でアジアのプレゼンスが増大する中、私も含めて日本人が、日本が、そのスピードに取り残されてはいけないということだ。

【味の素株式会社】

タイから輸入された小分け前の「味の素」

１、カンボジア味の素株式会社について。

同会社は 2001 年にタイ味の素販売株式会社のプノンペン支店として設立され、タイからの完成された製品輸入のもと、「味の素」や「Ros Dee」の販売を行ってきた。その後東南アジア全体での「味の素」の供給不足により、カンボジアでの生産工場の建設を視野に入れて同会社が設立されたが、現況では小分け包装のみを行うにとどまり、原料はタイからの輸入に頼っている。

２、カンボジアでの販売戦略

同国では 99.9%の人が味の素を食したことがあり、重要な調味料の一つである。さらに同会社の販売戦略として、次の様なものが採用されている。

・家庭での使用に合わせたサイズ展開

家庭での使用量や家族構成から求められるサイズをわりだし、独自の販売単位を用意し、価格を通貨の単位に合わせている。実際のマーケットでも、大きな包装よりも小分けにされた小袋での販売が主流となっていた。

・独自の現金直売手法

信用取引が十分発達していない東南アジアで味の素会社が採用している営業・販売方法であり、営業員が実際に味の素の袋を持って営業を行い、その場で現金と商品を交換する。このことが販売の拡大を実現している。

味の素社海外食品部の資料より

３、今後の目標と現状の取り組み

また、上記のように現状として、カンボジア味の素株式会社では「味の素」や他の調味料の製造は行っていないが、同社は長期的には生産も含めてカンボジア市場全てを担うこ

とを計画しており、「現地化」のための「人材づくり」が重要な目標になっている。
・人材づくりの要として、低賃金労働者を短期雇用するのではなく、長期雇用を見据えて社員の福利厚生や教育に力を注いでいる。例えば、工場労働者たちのほとんどが農村部から出稼ぎに来ている女性たちであることを考慮し、会社として寮を設置したりアパートを斡旋することを行っている。また都市部からＰＰＳＥＺまでの送迎バスも運行されている。（カンボジアでは普通、バイクタクシーが用いられるか、軽トラに労働者が多数乗り込んで移動している。）さらには社員食堂の設置や、社員旅行の実施など、（カンボジアでは旅行はポピュラーではない）日本の企業文化を取り入れた活動が行われている。

社員食堂

送迎バス

・「現地化」に関連した活動として、ＣＳＲ（企業の社会的責任）のとりくみにも力を入れている。学校や病院での栄養や食品衛生についての啓蒙、教育活動に加え、ゴミ拾いなどの都市衛生についてのキャンペーン活動も行っている。

味の素社海外食品部の資料より

４、工場を訪問して

同社は日本企業として安心・安全をブランドイメージとしている。これに関して二つのことが印象的なのだが、一つはカンボジアという後発途上国においても安全や安心といった事柄に価値が見出されることである。このことは国内向けＣＭで用いられている白くピカピカな中流階級のイメージとともにカンボジアのイメージを一変させるものだった。

二つ目、これが最も印象に残ったことだが、同社が「現地化」を目指す企業、国内市場をターゲットにした現地工場であるにもかかわらず、依然として「日本企業」としてのアイデンティティを保持し、誇りとし、武器としていることだ。社員の福利厚生を重視する姿勢や日本独自の企業文化の導入、衛生面に重きをおいたＣＳＲ活動など、同社の特徴は全て「日本らしい」ものである。

カンボジアでは「味の素」は日本製品、ひいては日本全体の代名詞であり、カンボジア人は日本人を見ると「アジノモト！」といって声をかけてくるのだが、さまざまな意味で「日本を代表する」この企業がどのような「カンボジア化」をしていくのか非常に興味深かった。

カンボジア味の素株式会社の正門

【住友電装株式会社】

１、住友電装株式会社について

私たちが訪問した Sumi (Cambodia) Wiring Systems Co., Ltd.はプノンペン経済特区で 2012 年 4 月から生産を開始した、ワイヤーハーネスの製造と販売を担う住友電装株式会社 31 か国目の海外拠点である。2011 年 2 月にカンボジア進出を決定し、その一年後には工場の引き渡しに漕ぎ付けた。いまだ多くの日本企業にとって未開の地であるカンボジアに注目したのは、既存製造拠点が飽和状態に達したことに加え、製造拠点の中国一極集中に伴って生じるリスク分散がその目的であった。

２、製造拠点としてのカンボジアのメリット

ワイヤーハーネス産業は労働集約型産業であるため、いかに多くの労働力を安く調達するかが製品の競争力に直結する。カンボジアには、その人口ピラミッドからも分かるように若くて豊富な労働力が存在する。現在東南アジア諸国の中でも後発発展途上国のカンボジアでは、依然福利厚生費まで含めた労働者一人当たり賃金が$200/月であり、隣国タイの同賃金$1000/月超に対して、労働集約型産業にとって魅力的な労働市場であることが分かる。さらに、政府が積極的にプノンペン経済特区設置などの外資誘致政策を行っているため、法人税や輸出税などの諸税免除や、様々な手続きの簡素化も進んでおり、市場的なリスクはあるものの、企業の参入環境は改善されつつあると言える。加えて、プノンペンは、タイのバンコク、ベトナムのホーチミンを一直線に結んだ線上にあり、また近くをメコン川が流れているため、東南アジアの二大都市である両市に対して製造品の輸送の面で比較的利便性の良い立地にあることも、企業の進出意欲を高めている。

３、社員の方々のお話

カンボジアで企業活動をする日本企業としての、海外移転と国内産業保護のバランス、そして中国や東南アジア諸国における経済発展に伴う労働環境の急速な変化について、大局的な視点から日本が置かれている状況をお話頂いた。

また、カンボジアにおいて現地スタッフやワーカーの人と一緒に仕事をする上で感じるカンボジア人の気質や、ポル・ポト政権時代からの影響が残る識字率の問題、そして依然汚職や腐敗が残る状況においても日本企業としてコンプライアンスを遵守していくことの重要性などをお話頂いた。

４、工場訪問をして

数年前までは中国が「世界の工場」であり、多くの日本企業が製造拠点を一気に移した。住友電装もこの流れに応じて、多くの製造拠点を中国国内に有する。しかし、2010 年秋頃には既にカンボジア工場建設を検討していたというお話を伺い、企業が国際市場において競争力を維持するためには、市場動向を先読みし、すぐに戦略を立て、それを実行に移す迅速な判断が必要なのだと実感させられた。更に、10 数年後にはカンボジアも労働賃金が高くなり、さらに次の拠点を探す必要があることを考えると、常に次を見据える姿勢が、日本企業が世界を相手に生き残っていくためには不可欠であると、東南アジアの熱気に満ちた急速な発展を目の当たりにし改めて考えさせられた。最後になるが、住友電装には毎年労働者の製造技術を競う大会が日本で開催されているという。今年 4 月に製造開始したカンボジア工場での単位当たり製造速度は、現在中国のそれの 5 分の 1 程度であるが、現在働いているカンボジア人ワーカーの中には、その技術大会に出場したいと言っている者もいるそうだ。そのワーカーと共に、工場を軌道に乗せるために日々奮闘している日本人社員の方々の姿を見て、お話を聞き、自分自身来年度から企業に就職する者として、今回現地で学んだこと・感じたことを消化し、企業自身そして途上国が共に発展できるような経済活動というものを今一度考えてみたいと思う。

【グッデイセンター】

１、HCC（Health Center for Children）について

HCC（Health Center for Children）はカンボジアの有力な現地 NGO の一つであり、1999 年に内務省の許可を得た。子どもの権利条約を始めとする世界規模の法律や条約に即して、子どもや女性の環境改善に尽力を尽くしている。今回は HCC が運営するシェルターのひとつ、プノンペンにあるグッデイセンター（Good Day Center）を訪問した。

HCC の具体的な活動内容は、子どもたちが人身売買や劣悪な環境のもとでの児童労働（性的搾取や物乞いなど）といった問題に巻き込まれないよう未然に防ぐ「予防」プログラムと実際に被害にあった子どもたちをケアする「保護」プログラムの 2 種類に分けられる。予防としては、実際に HCC のスタッフが村に赴いてワークショップを開催したり、ポスター掲示などの啓発活動を行ったりする。前者は実際に村に赴くことから、現地の人の協力が鍵となるため、スタッフは密接なミーティングを開く。ちなみに、今年初めまで HCC と C-Rights（国際子ども権利センター）が提携し、子どもや女性が悪条件下に置かれていないかなどをチェックする取り組みが行われていた。例えば、現地の学校でクラスに一人有志を募り、その有志に一週間に一度子どもの権利や教育の重要性などについて教え、そして、そこで学んだことを彼らが地域全体に普及させるという取り組みが行なわれていた。また、奨学金やカウンセリングの提供も行なっていた。カンボジアでは教育費自体は無料だが、それに伴う諸経費（制服、筆記用具など）が必要となる。この諸経費が用意できず、学校に通えなくなることもあるため、奨学金にはこのような諸経費も含まれていた。また、貧困が教育の普及の阻害要因ともなるため、水田用のポンプなど家庭の経済状況の向上に有用な物資提供も奨学金に含む場合もあった。

他方、保護活動とは、生活環境（シェルター）の提供や職業訓練などを指す。今回訪問したグッデイセンターでは女性を対象に、期間を明確には規定せず長期的に子どもや女性を保護している。（詳細は以下参照）グッデイセンターの他に、ココンにもシェルターを構えている。ここは保護の対象を男性としており、保護期間は 1 週間から 10 日間である。ココンはタイとの国境地域にあり、タイへ違法な出稼ぎに行かされる男性の保護を目的としているのである。その一対策として、トゥクトゥクなどのドライバーに、人身売買の被害に遭った、または遭いそうな人をシェルターに連れてくるよう指導している。実際に連れてきた場合には、交通費と多少の報酬がドライバーに支払われる仕組みとなっている。

また、HCC 自体は救出活動や法的支援などに取り組んでいないが、NGO のネットワークグループを利用して、協力体制を築いている。

ちなみに、カンボジア全体の動向として、2004 年の AFESHIP の事件（※）を機に国際世論から多大な批判を浴びたこと、2009 年に人身売買に関する法律が改正され、人身売買の定義が広くなったことなどから目に見える売春は減少傾向にある。しかし、家庭内暴力などは依然として解決が困難なのが現状である。

※NGO の AFESHIP が経営していたシェルターがトラフィッカー等に襲撃され、保護されていた少女や女性が全員連れ去られた。これに対し、政府は、少女たちは自身の意思でシェルターを出たとの見解を示し、真相究明などに取り組まなかった。

２、グッデイセンター（Good Day Center）について

上記にも記載したが、グッデイセンターは HCC の取り組み「保護活動」の中で、被害を受けた子どもや女性を長期的に保護するシェルターである。このシェルターは首都プノンペン中心部から車で約 30 分程度離れたところに位置している。グッデイセンターでの取り組みは子どもたちへの生活環境の提供だけでなく、職業訓練やノンフォーマル教育、カウンセリングや家族への援助も行なっている。

職業訓練には、理容業、縫製業、手細工があり、月曜日から金曜日までの 8:00~11:30／13:30~16:30 の授業時間のなかで決まった時間割で開講されている。他種の職業訓練を受けたい場合は、グッデイセンターから他のシェルターに通うことも可能である。また、一度シェルターを出た子どもや女性でも、希望すれば再びシェルターに戻り、職業訓練を受けることは可能である。

理髪の教室

手細工の教室

- 2007 年における実績

・115 人の人身売買・様々なかたちの搾取にあった人々を収容

・85 人に技術提供

・74 人を、もとの生活環境に復帰させる

・17 件の加害者を裁判で起訴

・10 人の保護した子ども達からなる組織をつくって、GDC の意思決定に参加し、積極的に関われるようにした。

子どもたちとの交流の様子（紙芝居）

【フレンズ ・ザ・レストラン】

１、フレンズについて

フレンズ・インターナショナルは、1994 年にセバスチャン・マーロットというフランス人によって設立された NGO でカンボジアを初めとする世界 12 カ国でストリートチルドレンの保護・教育・職業訓練などを通して彼らの社会復帰を支援している。

２、フレンズ・ザ・レストランを訪れて

今回私たちが訪れたフレンズ･ザ･レストランは元ストリートチルドレンが職業訓練のために働いているレストランで、レストランの売り上げはフレンズの運営費に充てられる。店内には”Student”というプリントが入った T シャツを着た元ストリートチルドレンの若者と、“Teacher” T シャツを着た指導スタッフがいて、”Student”は“Teacher”から調理や接客の職業訓練を受けながら働いている。料理の質は高く、店内もきれいであり、入口を入ってすぐ左にはガラス張りのキッチンがあり、中の様子を見ることができる構造になっていた。接客はややぎこちなく、注文をとってくれた“Student”の表情は硬かったが、一生懸命働いていた。食事の後はレストランの隣にある、同じくフレンズが経営しているショップに行ったが、こちらの店員さんはかなり慣れた様子で明るく接客してくれた。店内には元ストリートチルドレンが作った手作りの商品（タイヤのゴムをリサイクルして作った財布、バッグ、筆箱など）がたくさん置いてあった。

現在、首都プノンペンには１～２万人、シェムリアップ市街地とアンコールワット周辺には約 1500 人､シアヌークビル市街地とビーチには約 1000 人のストリートチルドレン（路上で働く子供も含む）がいると言われている。これらの子供たちは性的搾取やさまざまな暴力、麻薬などの危険と常に隣り合わせだそうなので、彼らから物を買ったり、物やお金をあげたりして路上生活を助長するよりは、こういう店でお金を使うことで彼らの社会復帰を支援したいものである。

フレンズ・ザ・レストランの店内

フレンズショップ前

【歴史的施設】

今回訪れた歴史的施設は、キリング・フィールド(Killing Field）とトゥールスレン虐殺博物館(The Toul Sleng Genocide Museum, S21)の二か所である。

１、ポル・ポト政権について。

－思想と虐殺：ポル・ポト政権の思想は反植民地主義と原始共産主義（もしくは毛沢東主義）の組み合わせだとされています。資本主義を徹底的に否定し、知識人の弾圧と貨幣・自由市場・私有財産・伝統文化・宗教の廃止、及びその阻害要因となる人々の虐殺という内容を持っていました。虐殺の対象となったのは、いわゆる「知識人」と一般に呼ばれる聖職者（僧侶)、教師、役人等以外に、医師や技術者、歌手、踊り子、外国語のできる者など、広範にわたります。例えば外国語ができる者を特に虐殺対象としたのは、外国への情報発信を防ぐ共に外国から入ってくる情報・思想を遮断して体制を盤石にするためだったとする見方がありますが、真相は詳しくは分かっていません。

－強制疎開：プノンペン入城直後に、クメール・ルージュは住民に対し都市疎開を命じ女性・子供・病人も例外なく地方へと強制疎開させた。これに抵抗した者はその場で殺害されるか連行されるかし、また疎開の途上でも妊娠中だった女性が出産して命を落としたり、子供が両親と離れ離れになってしまったりと多くの被害が出たことが分かっている。強制疎開政策の目的について、カンボジアを完全に農民の国とするために、障害となる資本主義を根絶するという目的があったと一般に推測されている。

－４年計画（1977-1980）：個人資産の完全な集産化と稲作を国の最優先方針とし、米産業の拡大を土台に新たなカンボジアを築くとする、ポル・ポト政権の経済計画である。稲作以外にも野菜栽培・植林・畜産・漁業などが盛り込まれ、カンボジアを経済的・政治的に完全に独立した国にするとともに農業の近代化を目指していた。ただし、実現不可能な目標設定や計画実行に伴い大衆が直面する困難の軽視により、結果として過剰労働、栄養失調、貧困、病気の蔓延などの悲惨な状況をもたらした。その結果、クメール・ルージュ幹部と兵士を除く多くの人々は、極端な食糧不足に苦しむこととなった。

－生活：原則として国民皆労働が課され、幼い子供や高齢者にも負担の軽い仕事が 14 歳以上の大人には運河や土手の建設、土壌整備、稲作作業などの強制労働が課され、ほとんどの人が週 7 日、1 日 12 時間労働したとされている。病気や体調不良などの理由があってさえも、労働をしないということは体制への裏切りと見なされ、逮捕されたり行方不明となったりする者が相次いだという。加えて、外出や他人との会話、家族同士の愛情や同情の表現まで禁じられていたという、極度な抑圧体制であったことも特徴の一つである。また、それ以前のカンボジア全てを否定する思想を持つクメール・ルージュにとって、幼い子供は「純粋」な精神の持ち主として高く評価されていた。子供たちは大人を監視し、村の中の密告者や刑務所の看守としてポル・ポト政権の統治において大きな役割を担っていた。

- **大量虐殺**：ポル・ポト政権下では約 200 万人とも言われる大量虐殺が行われた。確認されているだけで 388 箇所以上の虐殺現場（キリング・フィールド）がカンボジア国内に存在しており、また知識人階級が壊滅したことがポル・ポト政権下での生産活動を大きく阻害し、後の復興に際しても大きな問題となった。1977 年後半、内通者が至る所に存在すると信じるポル・ポト政権は大衆への粛清を強化していく。特にベトナム軍が撤退した地域の住民は、ベトナムへの協力者として多くが逮捕・処刑された。また、この頃からいくつかのクーデターや反乱が起きるようになり、失敗の度に多くの人々が逮捕・処刑された。クメール・ルージュは貧しい農民をもっとも「純粋」として革命の協力者と見なす一方、農民以外の国民を疑い、些細な違反行為や労働に対する不平を理由に逮捕・処刑を行った。家族の一人の失敗のために家族全員が探し出され投獄された、という事例も多かったようである。クメール・ルージュは敵を「内部の敵」と「外部の敵」に二分した。前者にはロン・ノル政権時代の政府役人や兵士、少数民族（ただしロン・ノル政権に全く関与しなかったクメール族を除く）、ベトナム人、カンボジアへの外国勢力の介入を許した責任のある社会階級としての知識人、裏切りの嫌疑をかけられた者、が含まれる。特に教育を受けた人々は、基本的に潜在的な敵であると見なされていたとされる。また「裏切りの嫌疑」については、仕事への遅刻や物品の破損、他人の死を悲しんだこと、病気にかかったことなどでさえ嫌疑の理由とされた。これに対し「外部の敵」はアメリカやその同盟国のタイ、他の社会主義国のことを表わしている。これら外国勢力がカンボジアの侵略と植民地化を画策しているとしたクメール・ルージュは、スパイ容疑者や外国語の話せる者をこの嫌疑で処刑すると共に、不都合な人間を処刑するための口実として利用した。「敵」とされた人々は逮捕され尋問センターで数か月間投獄され尋問された後、「キリング・フィールド」で処刑され、その場に埋められるか、あるいは井戸まで運ばれ投棄された。
- **ポル・ポト政権の終焉**：ポル・ポト政権はベトナム軍の侵攻とプノンペン陥落により 1979 年に崩壊した。『民主カンプチア史(1975-1979)』は政権崩壊の理由として以下の三つを掲げている。1 点目は、不可能な食糧生産目標により地方が窮乏する一方、秘密主義の裏返しとして虚偽の報告が横行し、農村間や農村と中央政府の間での情報伝達がうまくいかず国民の窮乏が放置されていたことである。２点目は、反乱の鎮圧と粛清、さらにそれへの反発による反乱の発生という悪循環が生じ、その結果ベトナムへの脱出者が増加したため、そこでベトナム軍の支援を受け軍隊を編成できたというものである。３点目に、ポル・ポト政権崩壊の決定的要因としてベトナムとの抗争を挙げている。ベトナムは軍事作戦に加え、反クメール・ルージュ派の政権形成を支援し、カンプチア国民救済統一戦線の設立を後押しした。その後ベトナム軍とカンプチア国民救済統一戦線は、大規模な攻撃開始から二週間ほどでプノンペンを占領、その後すぐにカンボジア全土の制圧に成功し、ポル・ポト政権を崩壊させた。ただし、残存勢力はタイ国境付近でタイや中国の軍事支援を得て抵抗を続け、クメール・ルージュという組織自体は 1998 年に最後の幹部が拘束され、ようやくその活動を終えた。

２、キリング・フィールド

キリング・フィールドはプノンペン中心部から南西へトゥクトゥクで30分ほど走ったチュンエク村(Choeung Ek)にある。キリング・フィールドとは、民主カンボジア時代の刑場跡の俗称であり、カンボジアにはいたるところにある。今回訪れたプノンペンのキリング・フィールドは元々華僑の墓地であったが、民主カンプチア時代、S21やプノンペン近郊で逮捕された囚人を処刑し、その死体を埋めた刑場であった。現在、129か所の穴から8985柱の遺骨が発見され、推計2万人がここで殺され、埋められたと考えられている。現在は公園として整備されており、中央には犠牲者を供養する巨大な白い供養塔が建てられ、園内には博物館がある。

キリング・フィールドの供養塔

最初に私達は博物館に案内された。館内では、クメール・ルージュや虐殺の経緯を簡単に紹介するパネルや当時の写真、処刑時に穴が開いた犠牲者の頭骨などが展示されており、キリング・フィールドを紹介する映画も放映されていた。次に死体が発見された、いくつもの穴の跡に案内された。園内では現在でも遺骨が発見され、実際案内された穴の跡でも収集されずに残った白い歯や骨が見えた。現在一番多くの遺骨が発見された穴は12畳ほどの大きさであり、400柱以上もの遺骨が発見されたという。その他にも、頭骨のない遺骨が160柱以上発見された穴もあり、それらの遺体はロン・ノル派の兵士のものだといわれている。また、園内には赤ん坊を叩き付けて殺したといわれる木や、処刑時に犠牲者の悲鳴をかき消すために、大音量の音楽を流していたスピーカを吊るしていた大木が残されていた。最後に訪れた供養塔は高さ10m以上あり、ガラス張りになっていた。塔の中には園内で発見された犠牲者の頭骨や大腿骨、服が収められており、遺骨は年齢別にまとめられていた。

私たちが行ったキリング・フィールドは30年ほど前には犠牲者の悲鳴や泣き声、断末魔、クメール・ルージュ兵士の怒号、処刑時の銃声や囚人を殴り殺す音、そしてそれを掻き消すための音楽が渦巻く刑場であったとは想像できないほど、のどかで虫や蛙の鳴き声しかしない公園であった。

３、トゥールスレン虐殺博物館

キリング・フィールドからプノンペン市街地へ戻り、市街地の中央を走るモニボン通りから少し脇にそれると、トゥールスレン虐殺博物館が見えてくる。民主カンプチア以前は高校であった建物は遠目から見ると、拷問刑務所に見えるようなも

トゥールスレン虐殺博物館外観

のではなく、日本の古い高校ともあまり変わらないものであった。しかし側まで近づくと、その異様さが分かってくる。敷地は高い壁と直線や螺旋状に加工された鉄条網に囲まれており、建物の白いペンキは剥がれ落ち、コンクリートがむき出しになっている場所も多くあった。拷問刑務所であった頃には鉄条網の一部には電流が流れていた。この博物館は 2009 年、世界記憶遺産(Memory of the World)に登録された。ここで収容された囚人は 1 万 4000 人以上、しかし生存者は 7 人しかいない。

最初に案内された部屋は、地位の高い囚人のための尋問室であった。壁はくすんだ黄土色で、床はくすんだオレンジと白のタイル模様であった。部屋の中にある鉄製のベッドには人の足首がやっと入るぐらいの鉄製の足枷が鎖で繋がれており、他には排泄物を入れるためのアルミ容器しかなかった。壁には S21 解放時にベトナム人写真家が撮影した、ベッドに足枷で繋がれたままの死体のモノクロ写真があった。窓は拷問時の悲鳴が外に漏れないようにきちんとガラスがはめられており、鉄の格子がはめられていた。

犠牲者の写真（一部）

次に案内された部屋はポル・ポトやクメール・ルージュを紹介するパネルに続いて、大量の収容者の写真があった。刑務所に収容する際、供述調書作成にあたって写真が撮られていたのである。10 代前半と思われる少年の写真や、学生のような少女、赤子を抱えた母親や、髭面の男など、年齢も性別も関係なく、年齢や性別も関係なく、幾百人という収容者の写真が 5 、 6 部屋に設置されたパネルに所狭しと並べられていた。それから解放時に発見された遺体の写真も展示されていた。モノクロ写真ではあるが、痣の跡や黒く映る血が見て取れた。当時働いていた者たちの写真もあり、人民服のような服を着ていた。刑務所で働いていた者の中にも 10 代前半と思われる少年少女がいた。彼らのような、大人に従順で、安易な気持ちで囚人を痛めつけられる若者はカンボジア共産党で重宝されていた。写真展示が終わると、拷問器具が並べられた部屋、煉瓦の壁で仕切られた簡易の独房が並ぶ部屋が続いた。拷問道具は囚人に大きな苦痛を与えるため、爪をはぐペンチや、先のとがった傘の柄、のこぎり、斧やハンマーなどの鈍器も並んでいた。加えて、水攻めのための浴槽のような木箱や桶があった。そのような展示がしてある部屋には、七人の生存者の中の一人で画家だった人物が描いた、刑務所や拷問の絵が展示されていた。水攻めの拷問にあう囚人、囚人が敷き詰められた大部屋、手足を縛られ担がれる囚人、ろくな食事も与えられずやせ細った囚人が描かれていた。モノクロ写真と違い、人の肌の色、血の色、痣の色が絵具で如実に描かれていた。また建物が高校だった時代の名残で中庭にあった運動用のロープを吊るす鉄の柱は、拷問時、囚人を吊るすために使われていた。同じ中庭には、当時の保安規則が書かれたパネルもあった。項目は 10 個あり、真実を述べよ、拷問時には悲鳴を上げるな、自分の不道徳の懺悔をするな、質問には考えることなく即座

に応えよ、など矛盾に満ちた規則が並んでいた。そして最後の項目には、「以上の規則を守らなければ、10 回の鞭打ち、または 5 回の電気ショックに処する」と書かれていた。最後に訪れた部屋には、そこで犠牲になった人々の頭骨が棚に安置されており、小さな供養塔があった。博物館の出口に向かう途中、生存者の中の一人のおじいさんがご自分の体験をお話ししてくださった。それは私たちの想像を絶するもので、目の前にいる人がそのような拷問にあっていたとは考えられなかった。民主カンボジア時代、カンボジア全土で約 150 万人が虐殺や飢えで死んだといわれる。今回クメール・ルージュが行った虐殺を後世に伝える施設に訪れ、改めて、カンボジアで何が起こっていたのかを肌で感じた。

【シェムリアップ観光】

１、トンレサップ湖について

ひょうたん型で「カンボジア」の心臓とも呼ばれるトンレサップ湖は雨季時には東南アジア最大の面積を誇り、その面積は琵琶湖の18倍にもなる。体重100ｋｇを上回るメコンオオナマズやフグなど600種類以上の淡水魚が生息しており、トンレサップ水系で採れる魚はカンボジア人のたんぱく質摂取量の60％を占め、重要なたんぱく源になっている。

２、トンレサップ湖における水上生活

現在トンレサップ湖で水上生活を営む人は 100 万人とも言われており、農村地域の開発や交通手段の発達により、居住地域の選択が十分に確保され始めている今においてもなお、彼らは地上よりも水上での生活を選び、住み続けている。水に浮かんだ建物は古いものから近代的な新しいものまで様々だったが、家の中にはテレビなど、地上のカンボジアの家と変わらないモダンな設備がきちんと備わっているように思えた。建物は民家だけでなく、学校やマーケット、協会、お寺、警察までもが揃っている。彼らはトンレサップ湖の水量が減ってくる乾季に、湖のより奥の方へと引っ越しを行なう。

３、観光産業の賛否

トンレサップ湖の水上生活を見に行って、観光産業の賛否について改めて考えさせられた。よその人の日常の生活そのものを観光にすることは果たしていいのだろうか。実際、たったの３０分程度のクルージングの料金は一人１５００円と、現地では高価格で、彼らの生活を金銭的に豊かにすることに貢献しているとも言える。しかし、私たちは彼らの家事仕事をする姿や友達と遊んでいる姿といったプライベートを異質である好奇心の対象として丸のぞきしているわけで、湖とカラフルな家々が作り出す美しい風景にカメラを向けながらも、少し罪悪感と後味の悪さに駆られた。

４、トンレサップ湖を訪れて

トンレサップ湖における観光産業は、住人の生活そのものを観光資源としている点で主に途上国に多く見られるものであり、先進国における風景や自然、近代的な都心部などを対象とした観光とは異なる。このようなケースの場合、私は第一に観光産業がその地域の住民の意図に反したものではないことを大事にしなければいけないと思う。観光産業は自分たちが誇りにする伝統や文化を外部の人々にアピールでき、かつお金も入ってくる、とプラスな側面もあるかもしれない。しかしお金持ちの外国観光客が自分たちを劣ったもの、異質なものと見下しているような気分の悪さも感じることもあるだろうし、地域の伝統や文化が安易に営利目的に使われ、お金や欲で人々の生活習慣が変化することにより、逆に伝統や文化を壊してしまうといった皮肉な危険もはらんでくるだろう。もちろん地元住民

全員がこのようなマイナスの側面に納得した上で観光産業に臨むのが理想だが、様々な考えを持った人がいるのでそれは難しいのではないだろうか。そこで、観光客の側である私たちができることとしてはこれらマイナスの側面を少しでも減らそうとすることであり、訪れる地域の伝統、文化、また生活やプライベートを尊重し、大事にする気持ちと、地元の方々に対する好意を忘れずに、接していくことが大切ではないかと改めて実感した。

トンレサップ湖の湖上小学校

【個人感想】

東京大学経済学部経済学科３年
國谷麻衣

このカンボジア夏合宿は、１年生の春にルワンダに行って以来、私にとって２回目のスタディーツアーだった。これまでの活動の中で、アフリカにフォーカスした勉強会やイベントが多かったため、東南アジアという地域を深く考えることはあまりなかったように思う。しかし日本人である私にとって、アジアが急成長する現代において、東アジアや東南アジアにある他国を知らないでいる、というのは難しいことだろう。実際、私たち一行はカンボジアに到着した翌日、プノンペン経済特区社（PPSEZ）を訪れ、たくさんの日本企業が現地に進出している実態を見学した。はじめに PPSEZ に勤務していらっしゃる上松さまにお話を伺い、続いて味の素、住友電装の工場を訪問させていただいた。今でもポル・ポト政権の傷跡が残るカンボジアが急速な勢いで成長している様子（実際の経済成長率は 6.9%(2011)）、その急激な変化に伴って生じている問題、その中での日本企業の立ち位置、実に様々なことを教えていただいた。たしかに日本と比べれば、カンボジアはインフラも未成熟で労働集約的な産業が多いが、成長著しいアジアの騒々しさが至る所に溢れていた。そこでお会いした日本人の方々も、どこか倦怠感を感じさせる日本のサラリーマンと違って、生き生きとした若々しさを放っていた。

プノンペンでの滞在中、PPSEZ の他にグッデイセンターへの訪問、現地の大学生との学生会議、キリング・フィールドの見学を行った。それぞれに思うことはあったが、特に心に残ったのは、「カンボジア人の中央政府への不信感」だった。徐々に先進国に近い国家システムを構築してはいるものの、カンボジア民衆の中に「政府はいい加減だ」という暗黙の了解がある気がした。例えば、何日間か私たちの活動に付き添ってくれたソチェットさんは、日本への留学経験があり、大学を卒業して司法試験合格を目指しているのだが、司法試験に応募しても未だにその日時が分からないと言っていた。学生会議の中でも、私たちは「カンボジアの教育の改善策」について国際機関・NGO の立場、政府の立場に分かれて議論したのだが、カンボジアの学生からは「政府はお金をわざわざ教育費にあてない」といった発言もあった。日本でも政府はどちらかというと悪者扱いされがちだが、カンボジアのそれとはだいぶ違うものだと感じた。聞いてみるとカンボジアで公務員になるためにはコネが必要で、安定した給料と退職金がもらえるそうだ。いくら優秀で国を支える志があっても、それができない社会とはなんて理不尽なのだろうと思う。

首都プノンペンからシェリムアップに移動し、さらに一部は乗り換えのハノイでも数日間過ごした。人々の衣食住すべてにおいてカンボジアより豊かで、どことなく人々から余裕を感じられた。こういった「アジアの急成長」は私たちの予想を上回る勢いであり、きっと私もゆっくりとしていられないのであろう。

東京大学教養学部文科三類 2 年
小林夏美

研修前、カンボジアと聞いて私の頭に思い浮かんだのは、クメール＝ルージュ、人身売買、急成長、格差などの単語だった。これらの単語はただひとつひとつ、なんのつながりも思い浮かばなかった。これらを結ぶのはなんだろうか。

実際にカンボジアに行って、カンボジアで生活を営む人々やカンボジアをビジネスの舞台としている方々、カンボジアの抱える問題に立ち向かっている NGO のスタッフなどの姿を見たり、話を聞いたりして、一つ答えを見出した。それは教育である。

まず、経済特区社に工場を構える二つの会社は、雇用姿勢こそ正反対であれ、共通するところがあったように思う。味の素は、現在はカンボジアでは製品生産は行っておらず、ブラジルやタイから輸入した製品をパック化するにとどまる。将来的にはカンボジアでも製品生産を手掛けたいが、現状では衛生知識などに問題があるため、無理だという。つまり、現在は工場経営を通じて、現地生産に足る人・基盤づくりに専念しているのである。他方、住友電装は、従業員の 8 割以上が最終学歴を小学校とするため、クメール語の読み書きの訓練を実施している。ちなみに、中国の工場のライン生産数と比較すると、かなりの差が見られるそうだ。上記の 2 社は双方とも、現地労働者の教育に努めていた。

また、人身売買や性的搾取などの問題解決に取り組む NGO の活動には、多く啓発活動が含まれる。子どもやの権利に対する理解や、衛生やリプロダクティブヘルスなどに関する正しい知識が、多くの人に欠けていることの裏返しである。

しかし、以上のような知識は私たちが“普通”に知っていることではないだろうか。教育を受けることによって、私たちはこれらの知識を身につけてきた。現在カンボジアが抱えている問題はひとつ形を変えて、なぜ教育が根付いていないのだろうか、という問いに帰着させられるのではないだろうか。

ここで、現地の学生から聞いた話によると、彼はプレイベン州出身であるが、プレイベン州では、たいてい両親が子供に家事などの労働をさせるそうだ。彼は勉強時間を確保するため、月曜日から土曜日までは家事はせず、日曜日だけ家事を手伝うよう言われていた。しかし、周囲からは、なぜ子供に家事をさせないのかと言われることもしばしばあったらしい。ここで明らかなのは、親が教育の重要性・必要性をあまり認識していないことであろう。私は、これがカンボジアで教育が根付いていない最大の理由であろうと思った。貧困や教師の質の低さも問題であろうが、これらは最大の原因ではないだろう。現に、彼の家庭も決して経済的に余裕があったわけではなかったとのことだし、教師の質が低いことは教育や教師としてのトレーニングを十分に受けていないことに起因すると思われるからだ。では、どのようにしたら教育の重要性・必要性の認識度合いは高まるのだろうか。

私は冒頭で述べた単語をつなぐものは教育だと考える。カンボジアで得た問い―教育の必要性はどのようにして認識されるようになるのだろうか―と今後更に深めていきたい。

東京大学教養学部理科二類 1 年
土屋潔浩

カンボジアは私にとって初めて訪れた東南アジア、そして発展途上国であった。カンボジアは 70 年代から 90 年代までは内戦状態の破綻国家であった。内戦が一時的に中断していた民主カンプチア時代には東南アジア最大規模の虐殺もあった。国連の PKO が派遣された歴史もあり、つい最近まで日本の六法に相当する法律も整備されていなかった。

実際に訪れるまではそのような悲観的な印象が先行していた。しかし、実際行ってみて感じたのは、「親近感」と「希望」であった。まず空港を出て目に入ったのは大きな幹線道路、そしてプノンペン市内では高層ビルの建築ラッシュが始まろうとしていた。

カンボジアの人と接して、彼らの正直さと礼儀正しさに驚いた。最初に市場で買い物をしたとき、まだこちらがカンボジアの通貨をきちんと理解しておらず、いくらでも騙せる状態にあったのに、商店主はわざわざ紙にレートを示して、向こう側とこちら側の金銭のやり取りがどのような経緯で行われているかを説明してくれた。カンボジア人の真面目な性格は日本人と共通するものがあり、親しみを覚えた。それが一か所に限らず、複数の店で同じようなやり取りをした。また、プノンペン経済特区の住友電装に訪れた際、従業員の教育担当の方がおっしゃった言葉に印象的なものがあった。カンボジア人従業員は研修においてアルファベットなどの読み書きを習うことになっているのだが、従業員の中には真面目に研修を受けられない、時間を守れない者がいると仰っていた。しかし、同時に担当者の方がおっしゃるには、「彼らには先生の話を真面目に聞く経験、時間を守らなければいけないという意識を育てる機会がなかっただけで、決して劣った人間ではない」ということである。実際、従業員の 3 割の最終学歴が小学校であり、小学校を中退した者もいる。私より若い従業員も多く見受けられた。彼らがきちんと「教育」というものに接したのは工場の研修がはじめてかもしれないのだ。日本の尺度ではカンボジアの物事を測れない。

一方、市街地を歩いていて、働いていないように見える男性が多い印象を受けた。彼らの中にはトゥクトゥクなどのインフォーマルセクターに従事している人もいるだろうが、暇そうな人が多い。日本人とは違い、女性が働く社会なのかと思い、学生の一人に聞いてみると「雇用がないんだ」と返された。出稼ぎで地方から出てきても、雇用がなく、インフォーマルセクターに従事するか、そのような仕事もままならない人が首都プノンペンには大勢いる。加えて、大学生も高学歴のために彼らに見合った就職口がないために、就職できない若者も多くいると聞いた。「失業」という問題を初めて肌で感じた。

このように、カンボジアに実際行ってみると日本が先進国になる過程でぶつかった問題と同じような問題にこの国もぶつかっている、と感じた。明治期には無職の高学歴が問題になった時期もあったし、教育が行き届いていないという問題もあった。しかし、別の視点から考えてみると、カンボジアが日本のような国になる希望もあるということだ。これから、カンボジアがどのように発展していくのか、楽しみである。そして、この研修ではカンボジアを初めとする発展途上国の「見方」を養うことができたと思う。